

前澤エンジニアリングサービスの代表取締役社長に、7月24日付で前澤工業上席執行役員バルブ事業本部埼玉製造所長を務めていた都倉剛氏が就任した。維持管理の時代を迎えた上下水道業界において、O&M事業に加え診断から計画・施工、さらには製品や工法の提案まで手掛ける同社に期待される役割は大きい。都倉新社長に上下水道事業に関する課題認識や同社の注力事業等について話を聞いた。

就任インタビュー

熱意と努力に応えてもらえる仕事に思い入れが

—上下水道事業をとりまく環境についてどのように捉え

られていますか。

都倉社長 中長期的には事業機会的大幅な広がりを感じている一方で、多くの課題も抱えていると認識しています。高度経済成長期に整備された我が国の上下水道は施設の老朽化が進み、更新や耐震化を

激甚化する自然災害への対応も課題となっています。インフラをより強いものにしていかねばならないというのは社会的な要請だと考えています。また、これも言われて

久しい話ではありますが、人口減少に伴う水道料金・下水道使用料の減少、税収減少による自治体の財政的制約、技術の継承が課題とされるなど、事業環境の厳しさは年々

ます。厳しい状況をとともに乗り越えるため、上下水道インフラを総合的に支えるパートナーとして自治体により高い価値を提供していきたいと考えています。

—これまでで特に印象に残っている仕事についてご紹介ください。

都倉 前澤工業に入社後、東京支店で2年、新潟営業所に転動して7年、合わせて9

りと、とにかくやるべきことが多く苦労した記憶もあるのですが、社内だけでなく自治体の方々にも仕事のやり方や人との付き合い方など様々なことを教えていただきました。

—要望へ対応するため必死に仕事していると、時にはお客様の方から「熱心にやってくれているから」と提案に関するアドバイスをもらえることもありました。熱意と努力

より高い価値の提供を

「水の安心」を次世代へ

着実に進めていかなければなりません。加えて熊本地震や千葉県他各地で多発した豪雨をはじめ、頻発化・

増しています。このような中で当社としては、維持管理や更新修繕の計画策定へのDXの活用、ウォーターPPPに代表される新たな官民連携手法等を積極的に提案し、自治体の課題解決にこれまで以上に踏み込んだサービスが求められる時代であると捉えてい

年ほど新潟県で下水道のプラント営業を担当しました。当時は高度経済成長期の下水道が普及に向けて拡大していく時期で、沢山の仕事を経験させてもらいました。通常の営業活動だけでなく、地元住民への下水道のPRを新潟県や新潟市の方々と一緒に行った

に伝えてもらえるのは嬉しかったですね。人と人とのつながりの重要性を社会人として改めて実感して、その後の仕事のやり方に良い意味で影響を受けることができたので、新潟という土地に対しては特段の思い入れがあります。

自治体の困りごとに寄り添う提案を

—現在注力されている事業

について伺えますか。

都倉 当社は親会社である前澤工業の製品の点検・修繕・更新を手掛け、メーカー系エンジニアリング企業として技術力を育んできました。前澤工業の埼玉製造所での研修をはじめ製造工程との距離が近い環境で長年培った、製品の構造に関する高い理解度と施工や修繕のノウハウに加え、不漏水でゲート更新が可能な特殊工法をはじめとする独自の技術も強みとしています。

—この中で特に、修繕や更新に関する事業領域の拡大に注力していきたいと考えています。例えば製品の生産終了等によって今後の設備修繕にお困りの自治体に対してはメーカーの垣根を超えてサポートしていきたいと思いま

す。また、これまで稼働時間や部品の摩耗状況をもとに計画を立ててきた修繕や更新について、さらに多岐にわたるデータを収集したうえでAIを活用した更新時期やメンテナンス頻度の最適化へとつながる技術の開発に取り組んでいるところですが、職員の減少が進む中で、技術継承の課題のひとつの回答として予防保

全を提示したい。現時点では研究開発の段階ですが、試行錯誤を重ねて自治体の困りごとに寄り添った提案を行っていきたくと考えています。

—最後に、社長としての抱負についてお聞かせください。

都倉 当社は6月から前澤ホールディングスの一員として新しくスタートを切りました。前澤ホールディングスがパースとして掲げる「世界がどんなに変わろうと、水の安心は私たちが変えない。」の一端を担う企業として「水の安心」を次世代へつないでいくことが使命だと考えています。時代の変化を的確に捉え、新しい技術を積極的に取り入れながら、安全で安心な施設運用を実現する最適なソリューションを提供して、水インフラの持続的な発展と強靱化に貢献していきます。

社長に就いて以降、全国の営業所・出張所を回って社員一人ひとりと話をしています。コミュニケーションの中心としているテーマは「何を伝えなければならないのか、何を伝えてはいけないのか」です。パンデミックや戦争な

ど、10年前には想像すらしなかった変動が国内外で発生するなか、変化に対応しつつも維持すべきものは何か、社員とともに考えながら仕事に取り組んでいきたいと思っています。

.....

(とくら・つよし) 1987年4月に前澤工業に入社。執行役員としては事業統括本部環境ソリューション事業部官需推進部長、東京支店長兼営業店営業強化担当、環境事業本部環境ソリューション事業部長を務めた。上席執行役員としては環境事業本部環境ソリューション事業部長兼環境プロジェクト管理室長、バルブ事業本部埼玉製造所副所長を歴任し、2025年4月に同製造所所長。趣味の剣道は五段の有段者で、週2、3回ほど仕事の後などに汗を流しているという。好きな言葉は剣道にも用いられる、繰り返ししの修練の大切さを表す「百錬自得」。また、読書や映画鑑賞も楽しんでいる。

1965年3月生まれの61歳。



前澤エンジニアリング 都倉 剛氏

サービス代表取締役社長